

主日の福音から黙想のヒント

最も重要な掟 (マタイ 22・34-40)

「心を尽くして…あなたの神である主を愛しなさい
…隣人を自分のように愛しなさい」

全世界が神の愛を知って愛で応え、同じ愛で人を迎え入れること。これこそイエスの生き方、これこそ宣教者の夢。

共同体のための祈り

天の父よ、
イエスは、最後の晩餐のときに
弟子たちの一致のために祈りました。
また、供え物を捧げようとするときに
兄弟姉妹とまだ和解していないことを思いだしたら、
供え物を置いて、まず、和解して来なさいと
わたしたちに教えてくださいました。
天の父よ、
わたしたちは、共同体の一致を保つために
誠実で謙虚な心をもってお互いに関わりたいのです。
そのための知恵をわたしたち一人ひとりにお与えください。
わたしたちは、この世の中であって、福音が持っている
人と人、グループとグループ、国と国を結ぶ力を
証しするように呼ばれています。
わたしたちの共同体の信徒、修道者、司祭、司教が、
心を一つにして歩む喜びを味わうことができますように。
二人、三人がわたしの名によって
集まっているところに共にいてくださると
約束されたイエスのことばに力づけられて、
福音的な交わりを築いていく決意を新たにいたします。
わたしたちの歩みを導いてください。アーメン。



10月 宣教の月

第4日曜日 2020年10月25日

「わたしを遣わして下さい」



共同体の在り方は福音の証し

教皇フランシスコの使徒的勧告
『福音の喜び』からのことばです。

「神の民の中でも多くの共同体の中でも、何と争いの多いこと
でしょう。地域社会や職場におい
ても、羨望や嫉妬ゆえの争いばかりがあります。キリスト
者の間においてすら、また然りです。霊を装った世俗精神
はキリスト者の一部を、力や信望や娯楽や経済的安定を求
めるうえでの妨げとなる、他のキリスト者との争いへと引
き込みます。

また、利己心にあおられ、教会への心からの帰属意識を
もって生きることをやめてしまう人もいます。ある人々は、
豊かな多様性をもつ普遍教会に属する代わりに、他の異なる
特殊なグループに属するようになります。」(98)

「世界のすべてのキリスト教共同体に対し、特別にお願い
したいと思います。魅力と光を放つ、
兄弟としての交わりのあかしとなって
ください。互いに世話をし合い、互いに
励まし合い、同伴する者として、すべて
の人がたたえられますように。」(99)

「兄弟愛の理想を奪われないようにし
ましょう。」(101)



カトリック教会の特徴：「一致」と「多様性」

教皇フランシスコの『福音の喜び』の基となった「キリスト教信仰を伝えるための新しい福音宣教」をテーマとした第13回通常シノドスには全世界から262人が集まりました。各大陸から、司教、修道者、信徒が三週間にわたって、教会の現状とこれからの福音宣教の在り方について話し合いました。

シノドスに参加して、強く感じたのは、教会の「一致」と「多様性」。教会を、一人ひとりにその場が与えられている「神の家族」として育てながら、人々や国々の間に正義と和解のために働くアフリカの教会。世俗化という厳しい状況の中で福音を証しし伝えようとするヨーロッパの教会。小共同体を中心に互いに助け合いながら、貧しい人々の人権の尊厳を求め続けているアメリカの教会。信仰の証しとして環境課題に必死に取り組んでいるオセアニアの教会。多宗教、多文化、貧しい人々と疎外されている人々との対話を大事にしながら歩んでいるアジアの教会。様々でした。ただ、こういう違いを超える一致を感じました。教会は、自分らしくいられるところだと改めて感じました。



小教区も教区もこうであるべきでしょう。信徒がいて、修道者がいて、司祭と司教がいます。時々、「司祭中心」、「信徒中心」と言うことばを聞きます。そうではなくて、教会は「キリスト中心」でしかあり得ないのです。一人ひとりがそれぞれの召し出しとそれに伴う違った形での信仰の生き方に呼ばれています。しかし、「共に」に歩むときこそ、教会の本当の美しさが表れます。そして、実りのある福音宣教が可能になります。「共に生きる」「共に歩む」姿は、福音を語ります。

ヨゼフ・アベイヤ司教

みことばから一つの光

「イエスはまた会堂にお入りになった。そこに片手の萎えた人がいた。人々は、イエスを訴えようと思って、安息日にこの人の病気をいやされるかどうか、注目していた。イエスは手の萎えた人に、『真ん中に立ちなさい』と言われた。そして人々にこう言われた。『安息日に律法でゆるされているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、殺すことか』。彼らは黙っていた。そこで、イエスは怒って人々を見回し、彼らのかたくなな心を悲しみながら、その人に、『手を伸ばしなさい』と言われた。伸ばすと、手は元どおりになった。ファリサイ派の人々は出て行き、早速、ヘロデ派の人々と一緒に、どのようにしてイエスを殺そうかと相談し始めた。」（マルコ3・1-6）

- 場面
- ・ 会堂で、人々と共にいるイエス
 - ・ イエスの片手の萎えた人との出会い
 - ・ 安息日に癒すかどうか注目される
 - ・ 片手の萎えた人を真ん中に立たせる
 - ・ 怒って、悲しみながら、皆を見回す
 - ・ 片手の萎えた人を癒す
 - ・ 癒された人の喜び、ファリサイ派の人々の反発



観点：**キリスト者の共同体は、小さき者、
虐げられた者を真ん中に置く共同体である。**

話し合いのため

1. この福音の個所を読んで一番心に響いたことは何でしたか。
2. わたしたちの共同体をもっと福音に近づかせるために、何が必要でしょうか。
3. わたしたちの地域では特に排除されている人々はだれでしょうか。

